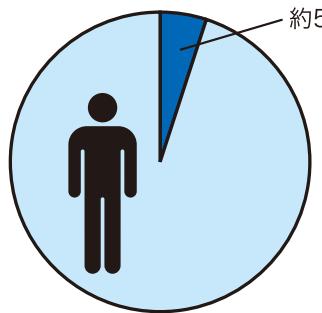




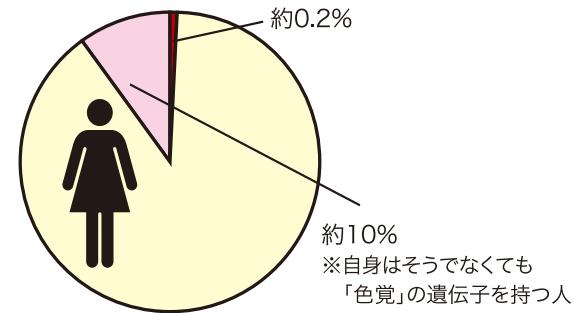
●友だちや家族と色の見え方が違う人は

日本では男性の5%（20人に1人）、女性0.2%（500人に1人）、全体で約300万人といわれています。遺伝によるもので、生まれつきの特性であり病気や障がいではありません。

男性の約20人に1人



女性約500人に1人



●この子は色の見え方が違うな…と感じたら

- 「これは何色に見える？」などの質問は避けましょう。
- 色の名前を聞かれたときは、たとえば「赤いバラの花よ」などと、花と色の名前を一緒に教えるなどの工夫をしましょう。
- 「この色がわからないの？」などの言葉は避けましょう。
- 色の見え方は、それぞれ少しずつみんな違うということを、理解しましょう。
- クレヨン・絵の具・色鉛筆などは、色の名前が表示されているものを使いましょう。
- 黒板に書く文字や絵は、明暗がはっきりしたチョークを使いましょう。

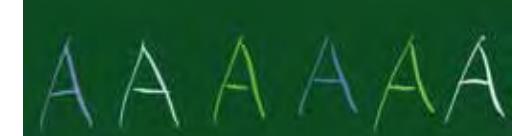


●黒板のチョークの色が見えにくい？

黒板に書かれたチョークの文字



色が違って見えたり、識別がつきにくい人の見え方（例）



- ・白と水色、黄色と薄緑、赤とピンクの違いがわからない
- ・目立たせようとした赤いチョークが一番見えにくい

※体験レンズを通して撮影しました。



●色の見え方が違う人は、こんなことがあります

- ・色鉛筆の赤と緑の区別ができない
- ・写生のとき、絵の色がおかしいと言われたりする
- ・図画工作の授業で、色がおかしいのではと言われたりする
- ・木の幹と葉っぱの色を同じ色に塗った
- ・夏、木に止まったセミをいっぱい捕った
- ・池を赤く塗った
- ・川などで魚を捕るのが得意
- ・カレンダーの日・祝の赤がわかりにくい
- ・パソコンで色指定ができない
- ・桜の花は白い
- ・山や野原で山菜をいっぱい見つける
- ・トマトを採ったら、緑のトマトだ
- ・バッタやキリギリスなどすぐ見つける
- ・お母さんの絵を描いたとき、顔色が緑だ
- ・信号の赤と緑、赤と黄色がわかりにくい
- ・焼肉やバーベキューのとき、生の肉を食べてしまうことがある
- ・花についた虫がすぐ見つけられる
- ・色の使い方が少ないと言われた
- ・色で見分ける資料が分らない
- ・魚の鮮度、野菜の鮮度が分らない
- ・白板につけるマグネットの色区分ができない
- ・回転すしの皿の色で、茶と緑の区別ができない
- ・写真等の色調整ができない
- ・薄い色の伝票の見分けができない
- ・髪の毛の毛染めの時、色が分らない
- ・ピンクの蛍光ペンでの印が分らない
- ・白と思って履いた靴下がピンクだった etc…

※人によって個人差があります。



木に止まったセミをいっぱい捕った



花についた虫がすぐ見つけられる



絵を描いたとき、顔色が緑だ



池を赤く塗った



魚を捕るのが得意

